The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	藤井先生のご講義と『思想としての空間』
Author(s)	新野, 緑
Citation	Osaka Literary Review. 2019, 57, p. 87-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤井先生のご講義と『思想としての空間』*

新野　　緑

藤井先生のご講義を初めて受けたのは、先生が一年間神戸女学院大学の大学院で講義された 1979 年のことでした。私は修士 1 年に入ったばかり。修士課程の院生のみを対象に小さなセミナー室の親密な空間で行われた贅沢なご講義で、テーマはミルトンの『楽園喪失』。先生がご著書『「楽園喪失」――思想としての空間』を刊行されたのはその 4 年後の 1983 年の 2 月でしたから、ご著作の構想がほぼ出来上がって、実際に執筆にとりかかっておられていた時期かと思います。手元にあるその御本（私が改めて大阪大学大学院の修士課程の学生となった時、当時の院生全員が先生からいただいたもので、談話会の後に先生の前に列をなして並んでサインをいただきいたのを懐かしく思い出します）の「あとがき」に、「『楽園喪失』については、これまでに、大阪大学（昭和五一年度）、京都府立大学（昭和五二年度）、神戸女学院大学大学院（昭和五四年度）で講義する機会をあたえられた」と書かれており、「この書物で私が述べた考えの多くは、それらの講義の間に生まれてきたものである」(198)とあります。したがって、ご著書の構想自体はこの時より前にすでに先生の頭の中にあったと思われますが、刊行を前にして、神戸女学院でのご講義にも自然と力がこもっていたように思います。

そのご講義は、『楽園喪失』をその構成に沿って解説されながら、「ここは」と思われる箇所をいくつか取り上げて、細密に分析されるという形でした。その時に書き留めた講義メモを見てみますと、叙事詩の伝統的な始まりの形や、古典とキリスト教の融合、カルヴァン主義、「存在の大いなる連鎖」など、いわゆるルネサンスから王政復古期に至る文学作品を理解

する上で必要な文学の基本的な約束事や、文化的・思想的概念などが、簡潔明瞭に説明されています。しかも個々の事象の解説には、必ずその典拠となる作品や批評が具体的な引用を伴って提示され、研究のあるべき基本姿勢がそこに示されているように思われました。

演習ではなく、講義形式の授業でしたし、毎回の授業で読む範囲はかなり多かったので、*OED* を引くことまではできませんでしたが、その日に取り上げられるはずの部分を予習しながら、今日はどの箇所を特に取り上げて分析されるのかを考えるのが楽しみでもあり、そこがピタリと一致すると少しばかり得意な気分になったものです。こうしたことを繰り返す中で、テクストの濃淡に関する意識が知らず知らずの内に形作られていったように思います。先生のご講義は、セイタンの人物造形、万魔殿の建築様式、信仰と人間の自由意志の問題など様々な問題に触れながらも、その根源に常に「言葉」に対する先生の鋭い感覚と強いこだわりがあることを感じさせるものでした。

たとえば、『楽園喪失』第 1 巻の、神に反逆し、地獄に落とされたセイタンが見る、あたりの風景の描写。

A dungeon horrible, on all sides round
As one great furnace flamed, yet from those flames
No light, but rather darkness visible
Served only to discover sights of woe,
Regions of sorrow, doleful shades, where peace
And rest can never dwell, hope never comes
That comes to all; but torture without end
Still urges, and a fiery deluge, fed
With ever-burning Sulphur unconsumed:
Such place Eternal Justice had prepared

For those rebellious, here their prison ordained
In utter darkness. . . . (emphasis added, I: 61-72)
おそろしい牢獄、その四方一面
巨大な溶鉱炉のごとく火炎をあげ、しかもその炎は、
光を放たず、見えるほどの闇が
示すものは、悲哀の光景、
悲しみの領土、暗澹たる物影。そこに平和と
安らぎは住みえず、万人を訪れる
希望もここには来ることなく、終わりない責苦が
また、火の洪水が、永久に燃えて尽きぬ硫黄から
火を発しつつ、つねに身に迫る。
そのような場所を永遠の正義の神は
この反逆者どもに備え、ここにその牢獄を
全くの闇の中に定めた。（藤井訳、『思想としての空間』41）

この箇所は『思想としての空間』でも取り上げられ、先生は、「通常の感覚では理解しにくい」描写として、下線を引いた矛盾撞着と思われる語句や表現に着目しつつ、最初の下線部の地獄に燃える「熱を放つものの、光は放たない火」が、一見不思議なものを記述しているかに見えながら、ロバート・ヘリックの「地獄の火」（“Hell fire”）という詩の描写にも見られるように、伝統的な考え方の借用であるのに対して、二つ目の下線部の“darkness visible”が、詩人独自の表現として究極的な意味の曖昧性を持つことに、私たちの注意を促されました（42）。

OED の“visible”(adj. 1)の用例が示すように、その表現は「闇が濃いために、闇そのものが凝り固まって、一つの物体のごとく目にうつる闇」、つまり 72 行目の“utter darkness”に通じる「全くの闇」を意味すると同時に、地獄の中で動いているセイタンとその手下がこの詩で実際に描かれている

ことからも分かるように、見通せる程度の闇、つまり「その中に蠢くものがかろうじて見える闇」という解釈も同時に成立させうる、と論じられています（42-43）。さらに3番目の下線を施した“a fiery deluge”という言葉もまた、“deluge”が元来「水」についての言葉であることから、一種の矛盾を含んでいるけれども、我々がそこに矛盾を感じないのは「日本語に『火の海』という言い方がある」ためだと説明されました（43）。そして、最終的にこれらの矛盾撞着語を多用することによって、セイタンの落ち込んだ世界が、神の世界の論理的明快さとは対照的な、矛盾と逆説に包まれた世界であることを詩人が意識的に表そうとしたと結論づけられています。

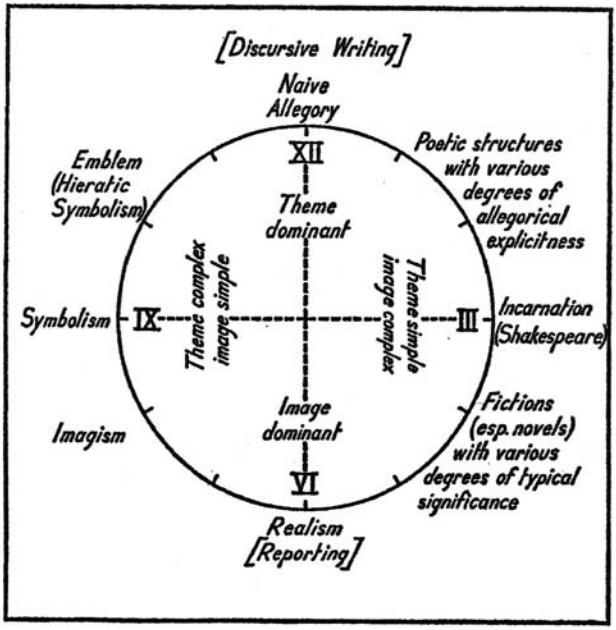
精読を基盤として表現に潜む矛盾や曖昧性に注目するという手法からは、明らかに先生がアメリカ留学中に学ばれたニュー・クリティシズムの影響が感じられるでしょう。同じ矛盾をはらんだ言葉でも、言葉の与えるインパクトや、伝統かあるいは個人の独自性かといった淵源の違いを、作品内外の根拠を示しながら、類似と対照を巧妙に用いてくっきりと跡づけられる論証の方法は、構造主義とも通じるとともに、先生の研究に特徴的な堅実さを感じさせます。

しかし、先生の講義ノートやご著書を今読み返してみて少し意外に思うのは、先生のご論考がテクスト内部、あるいは文学という学問領域の範囲内にとどまるのではなく、むしろ建築や美術、宗教など異なる領域に関する視点を多分に含んだ学際的な記述を多く含んでいる点です。じっさい、先生のご講義を受けて、文学以外の学問領域に関しての知識や関心を持って、そこから作品を見ることの重要さを感じ、これから学んでいく自分も、文学以外のもう一つの領域を作る必要があると、ぼんやりと意識したことを思い出します。もちろん現在の文化論や歴史主義といった批評的立場とは異なるとは思いますが、そうした新しい批評の動向が台頭してきた80年代に、先生が元来美術に深い造詣を持っていらしたからではあるでしょうが、そのような新しい動きをどこかで意識されていた、ということかも

知れません。

こうしたある意味では複雑に絡み合った批評的視点が示される中で、当時の私にとって、自分の研究にすぐにでも取り入れられるような、直接的なインパクトを持ったのは、そもそも『楽園喪失』という詩が、天上や、地獄や、堕落以前の地上といった、本来人間が自分の目で見て体験することができず、したがって通常の言葉では表現できない場所を舞台としており、日常の感覚では捉えることができないような世界をミルトンが描こうとしているという点でした。これは、上昇や下降といった登場人物の運動や、神の円環とセイタンの螺旋といった空間形象の対比、そして時間の表象などの思想的意義を論じられる『思想としての空間』という著書全体の基盤になっている考えのようにも思われます。じっさい先生は、ご本の中の「空間の内面化」と題された第５章で、外在する空間と内在する空間の関わりに焦点を当てながら、「我々はまず、外在する空間として描かれているものが、実は、一つの壮大な比喩であることに気付かねばならない」、あるいは、「ミルトンは、感覚を超えた世界を、また超越的な真理を、感覚に訴える力を持つ素材を媒体として表現しようとした」（187-88）と書かれています。もちろん、先生のご論考は人間の通常の感覚を超えた宗教体験を語るときの困難と、その克服の方法についてなのですが、それは宗教体験にとどまらず、文学全般にも当てはまる視点のように思われました。

そのことと深く関連しているのが、先生が地獄の表象を説明される時に、授業中に引用された、Graham Hough, *A Preface to* The Faerie Queene に提示されている（107）以下の図表です。



この図表までは掲載されてはいませんが、先生のご著書の第２章「地獄と混沌」の中にもこのハフの定義について説明されています（69）。

文学表象における意味とイメージとの関係を包括的に捉えるこの図を当時の私が正しく理解したとはとても言えないのですが、この図が印象的であったのは、授業の他にもう一つの要因があったからだと思います。神戸女学院での授業の後、藤井先生は必ず私たち学生をお茶に誘ってくださり、門戸厄神の駅近くの喫茶店で様々なお話をしてくださいました。先生の阪大での教え子でいらっしゃった柏木隆雄先生が当時神戸女学院に勤務されており、毎回授業が終わる頃に藤井先生に挨拶に来られていたので、じつは授業の後のお茶は、何よりもまず、柏木先生とのお話を楽しみにされてのことで、その間私たちはお二人の文学論をひたすら拝聴する、というのが常でした。このハフの図を説明された日、お茶の時に藤井先生がこ

の図を取り出され、「君のバルザックは、このあたりだ」と言って図を指し示されたところ、その図をじっと眺めていらっしゃった柏木先生は、「いや先生、こちらのこともありますよ」とおっしゃって、図の別の場所を指されたのです。それを伺って、少なくとも個々の作家、作品の描写の方法には固有の特徴があり、それらを包括的に捉える指標がありうること、また同時に同じ作家でもその描写の方法が時に揺れ動くのだ、ということを印象深く思ったことを覚えています。こうしたイメージとそれが表す概念についての考察は、明らかに先の地獄の描写に関する「超越的な出来事と感覚的な表象」との関係についての議論とつながっているように思われます。

ハフの図にはまた、リアリズム（Realism）という指標もあったのですが、何の論理も交えずに、起こったことをそのまま写し取るというような「リアリズム」が、概念としてはありえても実際には存在しえないこと、すなわちあらゆる描写、とりわけ言葉を介した描写には、単なる写実を超えた意味が常に付与されるのだということを考えると、そうした視点は、宗教的な詩人の作品のみならず、本来、より感覚的に捉えられる「現実」に近い世界を描き出すはずの、小説というジャンルにも応用できるように思われました。

とりわけ、私が研究対象に考えていたチャールズ・ディケンズは、一般には社会の現実を写し取り、実在する社会制度の批判を通してその改革を目指したリアリズム作家と言われていますが、そうした社会制度を客観的に、分析的に描くのではなく、人々の五感に訴える極めて感覚的、心情的な描写を多用する点で、その現実認識の浅薄さを非難されもする作家です。この一見歪んでいるかとも見える作家の一側面を説明する有効な手がかりを、藤井先生の示された「あらゆる空間描写は比喩である」とする視点が与えてくれるように、私には思われたのです。

もっとも、じつはこの私の心に長く刻まれていたはずのハフの図なのですが、今年勤務校で英文学史を担当し、アレゴリーの概念を学生に説明す

るにあたって、その図を取り出してみたところ、私が記憶していたものと異なっていることに気づいて驚きました。私の記憶の中では、アレゴリーとシンボルとが概念とイメージの表象の関係において対極にあり、リアリズムとナイーヴ・アレゴリー（Naïve　allegory）が対極にあるとは思ってもみず、そのうえ、本来その図に示されていたインカーネーション（Incarnation）という概念がすっかり頭から飛んでしまっていたのです。これは多分、インカーネーションという考えがどうも掴みにくかったせいだと思うのですが、それを思うに、当時の私の理解の至らなさと、先生の教えを曲解して分かった気分になっている自分の独り合点をつくづく反省したことでした。しかし、言い訳のようにもなりますが、そうした曲解があるからこそ、ある一つの作品解釈に用いられる視点や方法が、別の異なる作品にも応用可能になるのだ、ということも言えるように思うのです。

藤井先生は、「弟子は教師が作るものではない。弟子が師を選ぶのだ」とおっしゃって、自分から学生に何かを手取り足取り教えて、弟子を増やしていこうとする姿勢を「教師根性」として排除しようとしていらっしゃったように思います。しかし、今振り返ってみますと、たとえ多くの勝手な思い違いがあったにせよ、私は実に多くのことを、先生との自然な交わりの中で、教えていただいたことに思い至ります。その意味で、藤井先生はやはり私にとって今でも大切な師であるとしみじみ思うのです。

＊本稿は、第阪大英文学会第 50 回大会「シンポジウム・藤井治彦」（2017 年 10 月 28 日　於大阪大学）のパネラーとして（司会：服部典之　他の講師：渡辺克昭、大森文子、川島伸博、足達賀代子）での発表を補正したものである。

引用文献

Hough, Graham. *A Preface to* The Faerie Queene. London: Gerald Duckworth and Co., 1962.

Milton, John. *Poetical Works*. Ed. Douglas Bush. London: Oxford UP, 1966.

藤井治彦『「楽園喪失」――思想としての空間』研究社、1983